

ALPHA 同窓会

校長 × 卒業生の対談企画

卒業生によるみどり・ひと・まちづくり



プロフィール

大阪府高槻市生まれ。大阪府立大学大学院農学研究科修士課程修了。農学博士（九州大学）。大阪府立大学助教授、カリフォルニア大学客員研究員を経て、平成 25 年 4 月より兵庫県立人と自然の博物館長。平成 29 年 4 月より兵庫県立淡路景観園芸学校学長兼校長。兵庫県民生活審議会委員、勲丹波の森協会理事などとともに、阪神・ナリーンネット事務局長など震災復興のまちづくりや NPO 等にかかわる。兵庫県功労者表彰（教育功労）、第 5 回さわやか街づくり賞まちづくり活動部門などを受賞。著書に『アメリカン・ランドスケープの思想』『みどりのコミュニティ・デザイン』『パークマネジメント』などがある。

中瀬 勲

×

烏賀陽 百合



プロフィール

同志社大学文学部文化史学科卒業。兵庫県立淡路景観園芸学校景観園芸専門課程卒業。カナダのナイアガラ園芸学校に留学して園芸やデザインなどについて学ぶ。イギリスのキューガーデン付属ウェークハースト庭園にてインターンシップを経験。これまで 25 カ国を旅し、世界の庭園を見てまわる。ガーデンデザインや庭のイベントプロデュースのほか、大阪や東京、名古屋など全国各地で庭園講座やガーデニング教室などを開催。また、京都では日本庭園ツアーを主催している。2017 年 3 月ニューヨークで開催されたジャパンウィークでは石庭をプロデュース。著書に『一度は行ってみたい京都「絶景庭園」』（光文社知恵の森文庫）がある。

植物も含めた園芸全般を
暮らしに取り込んで
もらいたい

中瀬 幅広くご活躍をされていますね。

烏賀陽 ありがとうございます。日本庭園に詰まっている日本人の価値観や美意識を伝えられればという思いで、庭園案内を始めました。庭園紹介の連載をまとめた本『一度は行ってみたい京都「絶景庭園」』も出版させていただいてからは、庭園案内や庭園講座のお仕事が増えてきています。デザインの仕事も増え、今年の 3 月には、ニューヨークで開催されたジャパンウィークで石庭を造らせていただきました。今は、「サビの匂いのない庭」をコンセプトとした保育園の園庭のデザインを手掛けています。毎月、京都や鎌倉、エテ文化センターなどで、寄せ植え教室もしています。

いろいろさせていただいています。植物も含めた園芸全般を皆さんの暮らしに取り込んでもらうことができればいいなと思っています。

文学部 × 造園・
ネットワークの強み

中瀬 素晴らしいですね。ニューヨークでお庭を作られた時は、ご苦労されたのではないですか。私も海外での作庭経験がありますが、

庭石を探すのに随分と苦労をしました。確か、同志社大学文学部のご出身ですよ。海外と日本の庭、そして歴史文学という視点を持つておられるところが、烏賀陽さんの強みだと思いますよ。

烏賀陽 ありがとうございます。庭園案内でも歴史と植物の両方を知っていることは、確かに強みになっています。淡路で植物について学び、留学制度でナイアガラ園芸学校に行けたことで、自分の道が広がりました。ナイアガラで出会った人たちからは、とても刺激を受け、今も交流が続いています。

中瀬 烏賀陽さんのもう一つの強みは、ネットワークの広さですね。

烏賀陽 人のつながりは、ありがたいです。違う分野の方ですが、銅板作家さんに鉢づくりのワークショップをしてもらい、その鉢で寄せ植えをつくる教室をしました。

中瀬 それ！ 異業種とのコラボレーションが大事です。音楽や芸術、植物以外の事がきっかけになって広がっていくとおもしろい。

園芸がちがう分野に
飛び火していくおもしろさ

烏賀陽 園芸が違う分野に飛び火していくおもしろさがありますよね。失敗してもいい、亜流になってもいいから、いろんな分野の人とつながって、楽しいことができるといいなと思っています。

中瀬 そうそう！ 言葉が古いですが、アヴァンギャルドにどんどん新しい事をやってくださると良いと思います。淡路景観園芸学校は新しい学校なので、新しい事にチャレンジしやすいところが強みです。

烏賀陽 新しいことはドキドキもするんですけど、攻めるべきだなと思っています。

チャレンジして
アヴァンギャルドなものを

中瀬 これからチャレンジされたことは何ですか。

烏賀陽 中瀬先生のように恒常的な庭を海外で作ってみたいですね。「作る」、「作ったお庭を使った企画」、「メンテナンスでどう見せるのか」をパッケージにして提案していきたいです。

中瀬 是非、海外へ出て新しい庭をつくってください！海外のネットワークもあるので紹介しますよ。

烏賀陽 ありがとうございます！

中瀬 今日は、楽しかったです。在校生や先生にも、聞いてもらえると良かったですね。次からは公開対談にして、同窓会で本にまとめてはどうですか。

編集後記



対談を快く引き受けてくださった中瀬先生と烏賀陽さんに、この場を借りてお礼申し上げます。お二人の対談は多岐にわたリ、とてもわくわくする時間でした。今回ご紹介しきれない内容も多くあり、いつかフルバージョンをご紹介せねばと思っています。